爽と、全日本学生女子卓球チャンピオン ミキハウスから「北京へ」躍動する華

文学部4年 渡辺裕子さん

06年全日本学生卓球女子シングルスの頂点に立ったチャンピオンである。

「中スポ」11・2日号に、インカレ（10月・兵庫）でのプレー写真（最終ページグラビア）が載っている。

意志的なまなざし、内に秘める闘志、躍動感。絵になる人である。女子卓球が、愛ちゃんこと福原愛選手だけとは、もう言わせない……みたいなことを言ったら、

「エエッ、そうですかぁ」

と相好を崩した。笑顔がまた写真のとおりである。

ダブルスでは高校時代にインターハイで優勝経験があるが、シングルスでの優勝は初めて。

「取るべくして取った優勝です。本当に嬉しかったですね」

すでに風格のようなものが漂っている。

学生時代に卓球選手だった父の影響で卓球を始めた、という。小学2年で初出場したバンビの部（小学校低学年）で、いきなりの国内3位。

「ラリーがポンポンと続いていくのが楽しかったし、いきなりの3位が自信になりました」。その後は、山梨県にある実家からスポーツで有名な仙台育英高校に、そして中大へと進学した。中大を選んだのは、中学時代に中大で練習したことが大きかったそうだ。プラスして、「実は、ひとつ上の兄も中大卓球部だったんですよ」。兄を慕いつつ、妹はついに兄を凌駕した――民俗学でいう「妹（いも）の力」は、本来は兄を助ける妹の神通力のタトエだけれども。

そうはいっても、中大卓球部に入ったとたんに、障壁が立ちはだかった。「高校までは毎日コーチのもとで練習し、言われたとおりに練習していれば成果が出ていました。でも、大学に入学してからそうはいかなかった」。

体連所属といっても、授業にはきちんと出席する。文武両道たる中大の伝統だ。そのため、仲間との練習時間もバラバラで、全員での練習は朝のランニングだけ。コーチも毎日指導に来るわけではない。1年のとき、中国合宿の猛練習で肩を壊すなどケガも多かった。セルフマネジメントはかくも大変だが、「そういったものを乗り越えて精神的にも強くなった」という。

技術面の飛躍の陰に、古武術の大家・甲野善紀さんとの出会いもある。スポーツ界での先例では、陸上・末続慎吾の「ナンバ走り」、巨人から米・パイレーツ（マイナー）に新天地を求めた桑田真澄も投法にとり入れているらしい。従来のスポーツ理論にはなかった、全く独自の「うねらない、ためない、ひねらない」身体技法だ。それを、卓球の練習にとり入れた。「体が、ふっと軽くなりました。軽やかな動きが、卓球では必要ですから」と、その成果を語る。

4月からは、卓球の名門、ミキハウスへと進む。ミキハウスを進路に選んだのは、国際大会に焦点を当て活動しているからだ。部員は国際級の精鋭わずかに4人。朝から晩まで練習ができ、寮・練習場・食堂すべてが近接しているなど練習環境は抜群。慣れない大阪での寮生活に不安もあるが、「高校時代のチームメイトが既に所属しているので、ちょっと安心しています」。

やはり、聞いておこう。

愛ちゃんと対戦したことあるんで

すか？「私が中学生のとき、一度だけ対戦したことがあります。結果は……負けでした。彼女は小さい頃から国際大会に出場していて、経験が違ったことは事実ですね」

あまり意識した様子はないが、09年に横浜で開催される世界選手権、そしてモントリオール五輪を目標に世界へ挑む、となれば、これから対戦機会もふえるだろう。

ワセダに入る天才少女Vs中大が輩出した学生チャンピオン。実力もセンスにおいても、飾りじゃないのよ、学生チャンピオンは、というところを見せてほしいものである。

世界での活躍を視野に、中国語も始めた。

「世界で勝つためには中国人選手が強敵です。彼女たちに勝たない限り、金メダルはありませんから」

リンと弾んだ声だった。

◇

07年1月開催された全日本卓球選手権の女子複で、渡辺は同じ中大の野上沙矢佳とコンビを組み、福原愛・小西杏チームと4回戦で対戦、3―0で撃破しベスト16まで進んだ。またシングルスでは「上位16位」入り。ランキング9位となった。（滝沢）

『楽観的一心不乱』公認会計士試験突破
目指すはお客様満足度ナンバー1

経済学部4年　戸谷恵介さん

スーツ姿が決まっている。現役の4年生ながら、既に監査法人で働き始めた戸谷恵介さんだ。3年次で公認会計士二次試験に見事合格。その後2年間の実務・業務補助を経て、公認会計士へ、という道筋になる。

公認会計士を目指したきっかけは、大学入学前に送られてきたパンフレットだった。

「大学は勉強する場所。資格を取りたかった。挑戦するなら難しい資格を、とパンフを見ていて、公認会計士が自分に合いそうだなと思って。フィーリングでした」と微笑む。

中大の「経理研究所」に1年次から所属し、3年次合格コースを受講。経理研究所で勉強して合格した先輩が指導にあたるという、先輩―後輩の絆が強い中大ならではの組織だ。週5回、毎日2コマの講義。それに自分の勉強時間をプラスすると……。まさに合格までは、勉強漬けの日々だった。フィーリングの、なんと固い意志であることか。

大学生活を四字熟語で表現すると？

「『一心不乱』『無我夢中』、あたりかな」

となるそうである。

スランプもあったという。「知識を入れても精神的に落ち着かない。当然ですが、試験は時間が限られているし、記憶することは多いし。点が伸びないときもありました」。しかしそれも、前向きな気持ちと姿勢があったから乗り越えられた。悩んで勉強から離れてしまうと何も進まない。とにかくやり続ければ結果は出ます」と、明快だった。

自身の公認会計士像をこう語る。

「お客さまの立場に立って、その方が分かりやすいように説明できるようになりたい。自分の感覚に合わせるのではなく、あまり詳しい知識がない人にもどれだけ分かってもらえるか、を常に考えていきたいです」

公認会計士の世界では、4―5月が繁忙期だ。企業の3月決算を監査する時期。「終電で帰ったり、終電にも間に合わずにタクシーで帰ったり、泊まったりすることもあるみたいです」と笑う。プロの現場はそんなものらしい。

「最後まで諦めないで。途中で勉強を辞めることは本当にもったいな

い。今している努力を無駄にしないように、続けてほしい」

公認会計士の道を目指す後輩へ、戸谷さん自身のスタンスを応援の言葉に代えた。

（池田）

石油工場プラントの女性技術職
理工「CREW」―タフにしなやかに

理工学部4年　榊原仁美さん

3年の秋頃から学生の目の色が変わってくる。就活本番というわけだが、理工学部には、学生が主体になって就職活動を応援するCREW（クルー）という組織がある。応用化学科の榊原さんはその一人として、この1年間、フルに活動してきた。

「クルーの方々には3年の時にとってもお世話になったんですよ。私はサークルなどに全く入っていなかったので、先輩たちとの交流もなくて、就職についてなにも情報が得られない状態で、キャリアセンターに足を運んだんですね。そのときにちょうど自分と同じ学科のクルーの方がいて、その後たくさんお世話になった。学部卒では技術職に就くのは難しいと一般的には言われているんですが、その先輩方を見ていて、可能性があるならたとえ前例がなくてもやれるんじゃないかって思えたんです。その思いがあって、実際に私も技術職で就職できました。この思いをぜひ後輩にも伝えたいと思って活動に参加したんです」

可能性をかけた就職先は、石油会社の工場プラントである。女の子で石油工場プラントの技術職？　と思う人もいるかもしれない。

「そうかもしれないですね。実際に会社としても技術職で女性をとるのは初めてらしいんですよ。私の中でも、はじめは石油会社という選択肢はなかったんです。でも元々、化学工学系のエンジニアとして働きたいというのはあったんですよね。就職活動の中でいろいろ調べていくうちにこういう選択肢もあるんだな、ということに気がついて応募したんです。決まった当初は女性社員のいない環境で大丈夫かなって心配になりましたけど、逆に自分がこのような環境の中で仕事をがんばることで、女性でもこのような場所で十分活躍できるんだ、ということを示したいなと思ったんですよね」

納得のいく会社への就職内定を得て、学生主体の活動にも積極的に参加し、と大学生活を堪能しているように見える榊原さんでも、大学生活のスタートラインでは足踏みがあったようだ。

「実は家庭の事情で1年の前期はほとんど大学に行けなかったんですよ。その時は大学を辞めることまで考えてました。後期から復帰しても友達関係とか難しそうだし。でも、親の希望もあり、何とか後期から大学に足を運んだんです。大学では周りがわりとすんなり自分を受け入れてくれた。そういう意味では周りの友だち環境にとても恵まれました」

前期分をとり直す再履の授業はかなり大変だったのでは？

「確かに大変でしたね。一人で授業を受けることも多々ありました。さらに教職もとっていたのでそっちの授業もあって……でももうやるしかないって思っていたし、人間、その気になれば何とかなるものです（笑）」

4年次に、教育実習にいった。

「実習先で、まずはじめに校長先生から、どんな先生が生徒に好まれる先生だと思うか、と質問されたんです。そのときに出てきた自分なりの答えが、自分が尊敬できる先生、

だったんですけど、そこからですね。自分がどのような人間になりたいかを考えたのは」

理想の自分像。

「人にやる気を与えるような人間になりたい」

女性として、人間として、タフにしなやかに、榊原さんはチャレンジングな一歩を踏み出す。

（橋本）

法律と料理をはかりにかければ……「魚をサバくほうがいい」料理の達人

法学部4年　助川翔さん

笑って、こんな自己紹介。

「料理しかできないですよね。自分バカですから」

念を押すようだが、めでたく法律学科を卒業する人である。

小学5年のみぎりだったそうだ。よくありますね、ちびっこシェフもまじえた「TVチャンピオン」という番組。テレビ東京のそれに出場し、みごと準優勝に輝いた。

〝天才小学生〟ではありませんか。

「小学校が自分のピークでしたね、きっと」というのは、たぶんに謙遜で、料理の道を極めるべく、法律を勉強する傍ら在学中に調理師免許も取得した。そして現在は八王子のイタリアンレストランで、元帝国ホテルシェフの下でアルバイトに励んでいる。本格的なのだ。

「大学1年から3年までは中華料理店でバイトをしていました。で、4年になってからは今のレストランで働き始めました。深夜もダイニングバーで働いてます、ドリンクの勉強も兼ねて」

独学で栄養学や食品学も身につけ、まさに〝料理とともに〟の大学4年間だったそうである。就職活動も料理に関わるところしか受けなかった。

「レストラン、食品会社、あとは薬品会社も受けましたね。料理関係はほとんどすんなり受かりました。だから就活はあまり苦労せずにすみましたね」

〝好きこそものの上手なれ〟と言うけれど、こうはなかなかできないことである。

内定先は明治製菓。「この会社を選んだ一番の決め手は、〝一緒に働く人〟。やっぱり好きなことをしていても、楽しいか楽しくないかは周りの人によって変わるじゃないですか。この会社の同期はみなバカばっかりでおもしろいんですよ。自分もバカですから」

〝みなバカばっかり〟とも、なかなか言えないセリフである。会社の上司が聞いたらどうしよう？

中・高はバレーボールに打ち込み、大学でも中大イチといわれるバレーサークル、「サワーグレープス」に所属。3年ではキャプテンも務めていた。料理を始めたのも、実はバレーの影響だとか。

「小さい頃から母親やコーチに注意され、体を鍛えるために栄養面に気を使うようになったんです。これが料理に興味をもちはじめたきっかけですね」。母の愛あればこそだが、メキメキ上達した今となっては、「オレが料理するとふて腐れちゃって。うちじゃ台所使わせてもらえないんすよ」。このへんのサジ加減が難しい。

自慢してもいいのに、法律学科の周辺も「へぇ、初耳」という人が多いに違いない。「TVチャンピオン」のことは、ごく親しい友人にしか話さなかったという。「小学校の時はテレビ局の人が学校に撮影に来たりして。〝チャンピオン！〟って友だちにからかわれるのがイヤだったんですよね」。しかし、親しい友人に料理を作ってあげることもしばしば。

「自ら、はあんまりないですけど、

頼まれれば喜んで作りますよ。むしろ作らせてくださいって頼みたいくらい」。頼まれたら、この冬のおすすめメニューは？と聞くと、「うーん、そうだなぁ。チャーハンの上にエビチリを乗っけて、上に卵をかぶせて中華風オムライスみたいにしたのがいいかなぁ」。聞くだけで、おいしそう。

ところで、「TVチャンピオン」の席では、どんな料理を？

「オリジナルカレーがテーマだったときには、リンゴやはちみつ、イチゴなどで作った甘いカレールーを、ケーキのスポンジの上にかけて、クレープ生地をかぶせてデコレーションしました」

うーん……ちょっとこわい気もするけれど、これが「見た目で2位、味で1位」と審査員をうならせた。準優勝の賞金ざっと30万円！　そのお金で、「自分の部屋に子機付きの電話を買ってもらいました。うれしかったですね」。笑った表情に、やんちゃ坊主だったという小さい頃がのぞいたりもする。

そんな〝名シェフ〟も、大ケガをしたことがある。「大学1年の冬、バイト中に左手の人差し指をやっちゃったんです。中華包丁で。第一関節の3分の1くらいが吹っ飛びましたね」。その指は、もう無傷、きれいなものである。「すごいでしょ、人間の治癒力って。あのときはホント、切っていた大根がサクラ大根になっちゃたくらいに血がピューって……」とホラー風にドキンとさせて、「でも、大ケガは一度くらいはしたほうがいいんです、でないとまた調子にのりますからね。おかげでそれ以来大きなケガはしてないです。あっ、まつげが焼けてなくなっちゃったりはしたけど。毛が焼けちゃうんですよ。ホラ、腕の毛も指の毛も薄いでしょ」と腕まくり。というように口八丁手八丁なのである。

それにしても、料理と法律学の取り合わせ。どう結びつきます？

ふと思いつきでこちらから、どちらもサバく？　と向けたら、「そりゃいい」と膝を打つようにして、笑顔で返した。

「刑法は好きだったけどね、人を裁くより、僕はやっぱり魚をサバくほうがいいな」　（山崎）

Campus NoW

なんてステキなフランス語、フランス留学 バレエも磨いて「アン・ドゥ・トロワ」

経済学部4年　佐藤明奈さん

きゃしゃで、活発で、見るからに明るい。

中学生の頃、クラシック・バレエのレッスン中に初めて生でフランス語を聞いた。「なんてきれいな言葉」と驚いたという。

以来ずっと抱いてきたフランス語への憧れ。念願かなって、大学2年の春休みに2カ月間、フランスのルーアンに留学した。自ら選んだルーアンの地は、あのジャンヌ・ダルクが処刑された町なのだそうだ。

「着いて一番にバレエ教室を探したんですよ（笑）」。それほどバレエが大好き。1回ごとに授業料を払うシステムのオープンクラスを目当てにしていたが、「観光案内所に情報があるわけがなく」と苦笑い。

「結局はホストファミリーの知り合いを通じて見つけることができました」と言って、また明るい笑顔になった。

「語学学校に通ううちに、スペインを始めさまざまな国に友人も出会うことができました」。色メガネがはらりと落ちる経験もあったという。

「お金もなさそうな東洋人の女の子が重い荷物を持っているとかわいそうに思うのか、手を貸してくれるんです。フランス人にはクールなイメージがあったのに」

話を聞くと、荷物というのは買ったものを詰めすぎて壊れてしまったトランクなどもあるようなのだけれど。

学部の語学の授業はとり尽くした。「3年のときには、法学部のフランス語にはいり込みました」。ネイティブの先生に頼み込んで受けさせてもらった、としたり顔で話す。授業には真面目に出席する模範生である。

しかし、「それだけではつまらなくなった」。学ぶだけではなく大学や学部に貢献することも大切だ、と教える佐藤清教授のゼミに所属し、3年の春に経済学部新入生オリエンテーションの企画委員会の委員長をつとめた。

「先生が優れた研究者であることは当然として、温かい教育者でもあるんです。とても共感できる」

何気ない日常では関われない「企画」の運営に、自分の成長を見出せるのではと考えるようになったそうだ。「人とのつながり。自分が動かなければコネクションはつくり出せない」とつけ加えた。

佐藤さんは何事にも興味津々である。春から、アパレルメーカーに就職することが内定している。「自分も服が好きなのはもちろん、服を身につけることで人が幸せになるのを見たいんです。早く働きたい」。目標は「語学を活かしてバイヤーになること。フランスやイタリアに買い付けに行きたいな」と笑顔で話す。そのためにはまだまだ勉強が続く、とも。ポジティブな考え方が原動力だ。

クラシック・バレエのほうはどうなりますか？

「今は理想に近い会社にいけるので働くのが楽しみだし」と言ってから、「お休みにはバレエをしていける」と、こちらもハッピーなようだ。

今でも週5日のレッスンは欠かさない。彼女にとっての「満足している日常」とは、バレエあっての生活なのだ。

「教室での先輩に、看護師さんとして働きながら両立していらっしゃる人もいる。相談する相手も、目標とする人も近くにいる私は恵まれています」

アン・ドゥ・トロワ。

努力と夢がループして、幸せなロンド（輪舞曲）を踊る。

（竹下）

Can

中大で初、ドイツへ認定留学
〝哲学の国〟でつかんだ達成感

文学部4年 **高沢奈緒子**さん

「自分の言葉で表現して、たくさんの人とコミュニケーションをとりたい」

そんな決意を胸に、高沢さんは3年生の9月から約1年間、ドイツの大学へ留学。ドイツの大学検定を受けるため、日々ドイツ語の勉強に励んだ。むろんドイツ文学専攻。

留学は3回目。海外での生活に不安はなかったですか？という質問にも、「そんなになかったですね」と落ち着いたものだった。

「なんでもやってみればできるんだって思うんです。自分の可能性を決めるのは自分自身」と、何事にも前向き。言葉通りに、ドイツで直面した数々の困難も、持ち前の明るさとチャレンジ精神で乗り越えていった。

ちなみに、中大からドイツの大学への認定留学は彼女が第1号なのである。大学側にも、ドイツ側にも、留学生を支援する制度が整っていなかった。ドイツに到着して、最初の試練は「家探し」。住む場所も決まらないまま、ドイツへ飛び立たざるを得なかったそうだ。

「最初はホテル暮らしをしながら、寮やアパートを探してあちこちを回りました。『日本人』っていう理由で断られることもありましたよ」

なかなか定住できるところが決まらず、ついには大学の寮に直談判。5回もの引越しを経て、ようやく学生寮に落ち着くことができたそうだ。

学生寮に住めたこともあり、大学内に友だちもできた。しかし、ここでもある問題が彼女の前に立ちはだ

かる。言葉と文化の壁だ。

「ドイツ語が話せないと、相手は子どもと会話する時みたいになるんです。子ども扱いされて、対等に話をしてもらえていない感じがしました」

友だちと遊ぶときも、日本人との考え方の違いに戸惑ったという。

「『何がしたい？』って聞かれて、『何でもいいよ』って言うのは日本では普通だけど、ドイツではそれは『この子は私たちと遊ぶことに興味がないんだ』って解釈されちゃいます。自分は何がしたいのか、はっきり伝えないとダメなんです」

論理的な「哲学の国」と、「あいまいな日本の私」（大江健三郎）の文化ギャップでしょうか。

友人関係にしても、大学の授業にしても、ドイツは「自己表現」が求められる場所だったという。

1年間の留学生活を終えての率直な感想を聞いてみた。

「ドイツではいろんな国の人と交流して、『外国人』っていう観念がなくなりました。どこの国の人でも『この人はこの人なんだ』って大きな目で見れるようになった気がします。そういう意味では、成長できたかなって思います」

インタビューの最後に、彼女はこんなことを語った。

「人間、困難を乗り越えたところに人間的な成長があるし、本当の幸せがあるんだって思います。物をもらって幸せを感じても、それはいつかなくなってしまうけど、自分が苦労してつかんだ達成感は、これからも消えませんから」

自信とパワーを感じる。

将来はやっぱりドイツの大学に進学……ではなく、最終的にはドイツと日本をつなぐ仕事に関わっていきたいそうだが、現在は、仕事をすることや、資格を得ること、ワーキングホリデーに参加すること。選択肢を一つに絞らず、さまざまな可能性を考えているという。なんとも高沢さんらしい答えだった。

「また、挑戦ですね」

自分を鼓舞するように、声が弾んでいた。

（中田）

「やりたいことは〝勉強〟だった」ゼミで学び、現場で学び、外務省へ

総合政策学部4年　薄井寛さん

「やりたいことをやっていったら『勉強』だった」

3年次から横山彰ゼミに所属し、ISFJ日本政策学生会議「政策フォーラム2005」で最優秀論文賞を受賞した。

一緒に論文を作った班員は3人。3年になるまで、メンバーとはあまり親しいという間柄ではなかった。もともと、勢いのある人が集まるゼミ。ぶつかることも多かった。これまでに歩んできた人生を一人一人さらけ出し、価値観の共有を図った。「一人でも欠けたらいい論文はできませんでしたね」。はにかみながらも誇らしげにほほえんだ。

大学1年の英語の授業で日本の難民問題をリサーチした。難民問題に関する国連のシンポジウムに参加したとき、国連のトップや著名人が集まる会場に用意された料理に、違和感を覚えた。「難民問題を語っているのに、なんだこの豪華な料理は!?」。そのときから、「政策ってなんだろう?」という気持ちを持ちはじめていた。

大学2年の夏、外務省でインターンシップを経験。配属されたのはアフリカの地域科だった。政府同士で

しか話が進まない現場を見て、疑問をもった。「相手の顔が見えない状況で誰に対して政策をしているんだろうと思ったんです」

その後、総合政策学部の国際インターンシッププログラムで開発について勉強した。

「インターンを経験して、『何かをしてあげる』というのは驕りだなと思いました。現地の人たちも僕たちと同じで、よりよく生きたいと思っているだけなんだと思うんです。そこにギャップがあるんじゃないかと。開発を押しつけないほうがハッピーなんじゃないかな」

大学3年の夏に南アフリカを旅した。アフリカをひとくくりに考えたくない、いろんな人に会いたい、という思いからだった。「南アフリカのイメージは、『人種差別』や『治安が悪い』、『貧富格差』など悪いものが多いんですね。だから周りからは『そんな危ないトコにいくの？　バカじゃないの!?』と言われました」。しかし、「そう言われてよけいに行きたくなった」と言う。「みんなが凶悪なわけじゃない。自分がそれを証明する！ってね」

こう断言する。

「危ないと思ってたら行動できない。こんな思いできなかった」

言葉に自信が宿っていた。人と会うことで大きなイメージ、固定観念が変わっていく。それを知っているからこそ、イメージにとらわれることなく挑戦を続けられる。

この春から、外務省の専門職員だ。国を越えた人と人とのつながりを作りたい。「やりたいことをやってきました」――その続きを、これからも歩んでいく。

（猪瀬）

「劇団THE座」の華あるスター
本番前の涙、スポットライトの快感

法学部4年　中澤麻美さん

スラッとした姿に、華のある顔立ち。女優顔とでも言うのだろうか。そんな彼女が手にしていたのは、〝日暮里〟と書かれたビニール袋。似合わない。聞いてみると、

「2月の卒業公演に着る衣装をこの布で作るの。布といえば日暮里よ」。自分たちで一から縫うのだという。

「劇団THE座」。元々は総政から生まれたサークルで、現在約30人在籍している。以前は男女比2：8だったが、いまは半々。宝塚みたいに男役をやらずにすんだ、と笑う。

「オーディションのときは、みな必死。絶対にこの役をとりにいくってね。部員全員の前で、演技し、歌い、投票と演出家の意見によって決まるんです」

公演の約1年前から演出家が企画し、半年前にオーディション、4、5カ月前から練習をはじめるという長丁場。その間、役にのめりこんでしまう、という。

〝エリザベート〟で皇太后ゾフィを演じたときのこと。おばさんからおばあさんにかけてのいわゆる老け役を演じた。「いままで若くて気性の激しい役ばかりだったから戸惑った。自分の祖母を観察して研究したの。たとえば、手を動かしたいという脳からの発信が筋肉に伝わらない、とかね」。深い演技の世界である。

「あと、2年のときの〝シカゴ〟での主演・ヴェルマ役。原因不明で突如声がでなくった。発するとカスレ声。どうしようと悩んだ」。結局そのまま舞台に立った。「もともと低い声がさらに男性みたいになっ

ていた」。しかし、思わぬ展開。来場者アンケートは、「ハスキーボイス、すてきでした！」「かっこいい！」の嵐だったそう。

質問にポンポン答えてくれる彼女も緊張はするそうだ。「本番2～3週間前は不安定になる。振り付けも歌も、これでよいのか悩んでしまう」。本番直前には、みなで円陣をくむ。「いままで一緒にやってきた役者、裏方……。もうすでに泣きそうになってしまう。せっかく〝どうらん〟

（舞台用メイク）で化粧したのにね」。しかし、いざスポットライトを浴びると〝快感〟らしい。これぞ舞台役者。

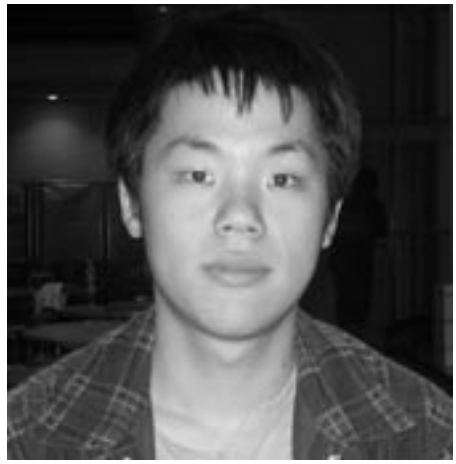
この先は？と尋ねると、「こっちの道に進みます」とハッキリ。「でもいろいろと厳しい世界よね。覚悟しないと」

〝華〟の字が餐（さん）と浮き立つのは、激動の日々に揉まれてこそ。耐える力を彼女はもっているにちがいない。（白田）

野村総研SEへのアルゴリズム 人と関わり「真ん中から考える」

大学院理工学研究科修士2年 霜山渉さん

気さくな人柄が、初対面を感じさせなかった。そんな彼は理工学部電気電子情報通信工学科から、院へと進んだ。「電気電子情報通信工学科ってめちゃめちゃ長いですよね。でもこれが、大学を決めた理由でした。幅広く学べるかなと思って」。初めは情報通信に興味があった。「インターネットっていうキーワードが旬だったとき、これから伸びていきそうな分野かなと。でも学んでいくうちに、情報通信の基礎でもある〝情報〟の分野に興味を持っていきました。研究室もこの分野」。ここでは、問題を効率的に解く方法、すなわちアルゴリズムを研究する。「例えばパソコンでいえば、周波数を考えてそのパソコンが持っている力を最大限に生かす方法を見積もったりするんです。これもアルゴリズム」。先生のようにすらすら説明してくれた。



大学時代はサークルとバイトの日々だった。「多摩キャンパスと合同のスキーサークルに入っていました」。合同サークルにしたのはいろいろな人と関わるため。このサークル、OB会には60過ぎのおじいちゃんまで来るという。思いがけず、年齢を超えた幅広い出会いがあったようだ。そのサークルで、霜山さんは主将となった。

「僕はもめごとにはなるべく関わりたくなくて、いつも中立的立場をとっていたんです。それがなぜか〝こいつは真ん中からものを考えられる〟って……。嫌でももめごとに関わる立場に任命されてしまいましたね」。また、他大学との合同大会の運営をしたりと、上に立つことが多かった。院生の時には、学生団体にも入り〝学生の、学生のための金融勉強会〟の運営にも携わった。

5年間続けた電話の受発信のバイトでも、「声だけのコミュニケーションって難しいんですよ」といいながらもコミュニケーション力を発揮

した。発信業務の成績は100人中トップだった。会社から表彰もされたという。

そんな霜山さん、卒業後は「野村総合研究所でシステムエンジニアとして働きます。院生には技術者になるって人が多いけど、僕はスペシャリストと呼ばれることを選ばなかった。視野をもっと広くもてるようなことをしたかったんです。関わる人も、場所も、仕事の幅広さも含めて」。システムエンジニアとしてなら、アルゴリズムやプログラムの知識を十分に生かせる。そして、プログラマーをマネジメントするシステムエンジニアは、顧客のニーズを組み入れて、ビジネスに必要なものをシステム化するなど、仕事は幅広い。

「金融に強い会社であることも魅力でした。実は僕、小1から今まで、毎日出納帳をつけているんです」。これはおどろきだ。独学で簿記も2級までとってしまうくらい。「無駄づかいはしますよ。でも、こうやって使った、っていうのがわかれば次は控えようって反省できるじゃないですか」。いい旦那さんになりそうだ。

そしてやっぱり「この職種、いろんな人に関われるのがいい。会社の人、協力会社、そしてお客様ってね」と、ニコリ。彼が道を選択するにあたって、いつでもこれが決め手なのである。そしてこれまで多くの人との関わり合いが、その魅力をつくり出しているのだろう。

（山崎）

文武両道の4年間 合気道の「気合い」、中大ロースクールへ

法学部4年　中垣文也さん

文武両道の鑑のようなセリフである。

体連合気道部に所属するとともに、多摩研究室に入室し司法試験の勉強をしていた。

合気道部での稽古以外は、ほとんど勉強の時間だったのですか？　「そうかも。司法試験は甘くないからなぁ。それに法律家になるつもりで中大に来たし。真面目にきちんとやるべきことをしている人間が受かると思う」

4年次では司法試験の択一に合格したものの、論文で不合格。しかし見事に中大法科大学院への合格を果たした。

3年の秋は精神的に辛かった、と振り返る。研究室で約2カ月半おきに行われる試験に落ち、一度定席を失った。「次の試験で研究室に戻れたけど、それでも模試の成績は上がらなかった」。そこから合格者の情報を聞いたり本を読んだりして、自分の勉強方法を分析した。その甲斐あってのロースクール合格だった。

しかし両立は大変ではなかったのですか？　合気道部は「部活」特有の厳しさがありますけど。

「拘束されることは多いけど、先輩や同期の理解もあって続けられた。合気道をすることが気分転換になっていたんだよね」

それでも基本的に勉強が好きだと、爽やかな笑顔で語る。「部活と勉強がうまい具合に息抜きになった。部活の合宿などで部活をし過ぎたら、勉強が息抜きに。逆もそう。両方好きなことだから4年間やってこられたのかも」。合気道を通して身についたことは何ですか？　「基礎の重要性やバランス感覚、周りを見る姿勢。これは実生活で生きてくるはず」

弁護士は正義の味方、という認識がずっとあった。正義感の強い人である。最近は、経済法系の弁護士、検事に興味があるという。

「まだまだ勉強することがある。ロースクールで2年間みっちりやっ

「勉強一つじゃだめ。偏った人間になる。身体を動かすことは必要ですよ」

て、夢を叶えたい」

キリッとした胴衣姿がまた一回り大きく見えた。

（池田）

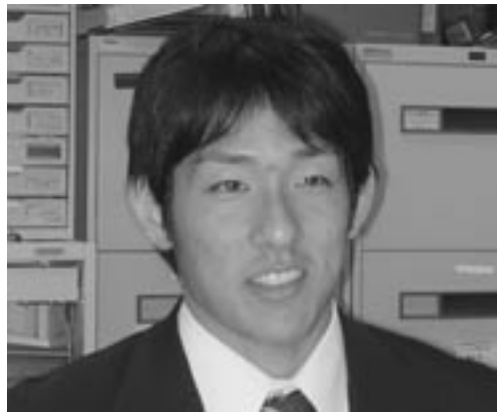
準硬式野球部「東都V」支えて まっすぐ銀行マンへの道

総合政策学部4年 長谷川剛さん

「こんにちはー、はじめまして」

電話でのイメージとぴったりの好青年。エンブレムのついたブレザー姿でやってきた。12・13優勝報告会のあとのインタビューである。

06秋季東都一部リーグを制した中大準硬式野球部を裏で支えた副務。体育連盟常任委員会副委員長もつとめた。



「自分はもう引退したから試合に出てはいないんだけど、やっぱり嬉しいよね」

〝野球＋まじめに勉強〟で選んだのが準硬式野球だった。「もちろん練習はやるけれど、授業優先。そのバランスが合っていた」。小学2年の頃から、野球をはじめ、中学は軟式、高校は硬式、そして大学は準硬式と、3種のボール・スタイルを体験した。

「打つほうが好きですね。2年の秋からレギュラーでした。内野手でずっと一塁で四番バッター。だけど、守るのは下手でしたね」と照れながら。

最高の瞬間は？

「最高だったのは、3年のときの春季リーグ開幕戦、神宮で打ったホームランですよ。親も観に来てくれていたから、嬉しかったな」

これでも硬式野球（部）は何度か寮でも取材しているけれど、「ジュンコウシキ」は知らない。そう言ったら、

「準硬式の球は、打ったときカタイ。で、伸びるけれど硬式より距離がおちる。コツは、球を上げないで、角度を落とすこと」。なるほど……同じ野球でも微妙にちがうのね。

取材中、終始笑顔で優しく答えてくれるので、ちょっとイジワルに、「写真で見たけれど寮、汚いですよね」と言ってみた。「硬式と比べてどう？」と言われたので、正直に「準硬式のほうが……」。すると、「ハハハ、でも洗濯とか自分でやってるしね。準硬式は、皆で勝ちをとりにいこうっていう気持ちがある。バーベキューや花火をやったり、31人、いい仲間だよ」と、明るい笑顔をつくった。

春からは、地元千葉の銀行マンになる。そこで軟式野球部に所属し、土日は野球漬け。

「やっぱり野球を捨てるのはモッタイナイ」

営業数字も、野球の数字も、両方のスコアを上げないとね、とプレッシャーをかけたら、「そうですよね」とまた笑顔でこたえた。

（白田）

女子アスリートの喜怒哀楽 400リレー優勝を手に 「これで引退」

法学部4年 花島裕さん

文学部4年 菅野美帆子さん

昨年5月の関東インカレで、女子100M×4リレーのメンバーとしてチーム優勝を果たした。ともに個人100Mのファイナリストとしても活躍した。3位に入り、11秒台を樹立した菅野美帆子さん。女子陸上競技部のキャプテンとして、全日本インカレでも100M、200Mで自己

新記録を連発した花島裕さん。このところ低迷していた女子陸を、大いに盛り上げた。

走り続けた4年間。陸上に明け暮れた大学生活。そして勝ち取った栄光である。

陸上との出合いはともに小学校高学年。「課外活動で陸上をしていました。あの頃は駅伝もやってましたね。距離が短かったから」と花島さん。ソフトボールをしていたという菅野さんは「先生に『陸上をしてみない？』と言われたのがきっかけ」と語る。それ以来10数年、〝道を外れる〟ことなく走り続けてきた――並みの人間にはできないことだ。

優勝した400Mリレーでは、花島さんが1走、菅野さんが2走を担った。リレーにかける気持ちが今年は違った、という。それまで、優勝にあと1歩だったのに、と唇を噛む年もあった。

「でも、今年はいけると感じたんです」。予感の通りに、日体大、筑波大などの強豪チームを抑えてVのテープを切った。女子陸では2年ぶりの優勝だという。リレーと個人競技では、リレーの方がいい、と口をそろえる。「プレッシャーは大きいけど、勝ったときには本当に幸せ」（菅野さん）、「唯一、バトンをつなげる競技がリレー。そのことが嬉しかった」（花島さん）。笑みがこぼれる。

その陰で、スランプに陥った時期もあった、と振り返る。「3年次に、いい記録が出なくなってしまったんです。かといって、特に走れなくなったということでもないんです」。それが変化したのは主将になってから、と花島さんは打ち明ける。

「冬に練習量を増やして頑張りました。2月（06年）に監督が交代したことも大きいかも」。高橋・新監督は、朝から晩までグラウンドにいて、部員の指導をしていたという。

花島さん（左）と菅野さん

「それが良い意味でプレッシャーでしたね」

菅野さんの場合は少し異なっている。3年次まで高校時の記録を塗りかえられなかった。それを脱したきっかけは？

「4年次という最後の年は、結果をどうしても出して、陸上をずっと応援してくれた両親に恩返しがしたかったんです。けじめをつけたいという気持ちもありました」

スランプを、プレッシャーを乗り超えるために、走り込む。練習は週5日。平日は講義の合間に1人でやることも。全員がそろう土日には、多いときには5―6時間の練習をこなした。合宿も春夏1週間ずつあり、集中して力をつける機会だった。「強くなりたい、強くなりたいという気持ちを持って」と心を鼓舞する監督の指導法も大きかった。

その結果の、大学4年間を総括するような「V」。ともども感激は大きいわけである。

今後も陸上を続けますか、と聞いたら、申し合わせたように、「続けません。もういいです（笑）」とあっさりしたものだった。

春から花島さんは商社へ、菅野さんは食品メーカーに就職が決まっている。どちらも陸上部はないという。

「先輩の話によると」と花島さんが笑顔で続けた。「1年くらい陸上と離れてたら、またやりたくなるそうですけど」

これからの女子陸上競技部。「伸びていきますよ」（菅野さん）と期待大のようだ。「今の監督に1年間見てもらって、皆の気持ちの入れようも違ってきているはずです。まだまだ強くなります」と前キャプテン・花島さんは後輩たちに期待のハッパをかけた。

（池田）

放研・インターネット運営委員会、縦横に
映像経験生かして「映画配給会社へ」の夢

法学部4年 **松藤邦弘さん**

サークル棟でのインターネットも、いまでは日常の風景になっている。私たちは利用するだけだが、CスクエアにLAN敷設というハード面の構想とともに学友会のHP（ホームページ）作りも担っている人たちがいる。法学部4年の松藤邦弘さんもその1人だ。

インターネット運営委員会という。

本人は、「それまでホームページを見るぐらいしかネットに関わることはなかった」と言うのだが、きっかけは？

「所属していた放送研究会で、2年生のとき文連委員を務めることになったんです。学友会の。その関係で、インターネット運営委員会に入ることになりまして」。この委員会は、文化連盟をはじめ7つの連盟から2人ずつ選出された学生代表で構成されている。

03年にCスクエアが建てられるとき、LANの設備が整っていたほうがいいのではないかという話がでた。

「実は、学生だけでなく、ITセンターや広報課、学友会事務室の方々など、いろんな人たちの協力があって初めて今の状態が維持されているんですよね」

インターネット運営委員会は、学友会HPの運営を委託されている。昨年度には中大のHPのリニューアルと同時に学友会のものも新しくしようといろいろ工夫した。

「一から作り直し。サークル報をリアルタイムで表示したかったんです。検索ウィンドウも設置してサークルを探しやすくできました。実現したコンテンツとしては、『サークル』でイベント情報掲示板を。『スポーツ』では中大スポーツさんとリンクして情報の入手を。『リーフカフェ』では、全メニュー網羅したコーナーなんてのもつくりましたよ」

たとえば、実際に「リーフカフェ」のページを見てみると、取材は05年10月某日に行われたとあるが、「全メニューを体当たり試食。しかも半日で」やってのけたと聞いて驚いた。ひとりで？　とたずねると、「さすがにひとりでは無理があって、仲間に手伝ってもらいましたけど」。それにしても、できる限りカロリー表示も、との細やかな調査は女の子にもうれしい心配りだ。センスのよさもあってか、普段は1日約100件、新歓時だけその3倍というアクセス数が、今年度は500件にも飛躍したという。「成果が出た」と満面の笑みがうかぶ。

もう一つの顔もある。放送研究会での松藤さんだ。

1年から所属し、3年の時には「4部長」の一つである映像部長を務めた。

「映像をつくることに興味があるんです。映像部、アナウンス部、音響部、製作部に分かれてゼミなるものを開きます。その年は、前年に縮小された『ゼミ』をどうにか立て直したい、と力を入れて取り組んだ代でした」と語る。

そのときに大切だと思ったのは、調査と検証。なにしろ一度会で決定したゼミの縮小を再び覆すわけだ。

「満足度を5段階で評価してもらうなど、詳細なインタビューを行いました。基盤を固めカリキュラムを組むことは難しいですが、僕らの学年が長を務めたときの1年生は今作品を積極的につくっているから、成功したと言えるのではないかな。華はないけど、こつこつ頑張るのが放研だから」

固い思いがある。就職はぜひとも

映画を配給する会社に。「採用枠少ないしなぁ」と嘆息交じりの厳しい業界だが、あえて「来春（採用）」に賭ける。松藤さんの選択は、ポジティブな留年である。

自らをきっちりした性格、と分析する。「インタビューのために自分をまとめてきました」と言って「自己分析ノート」なるものを用意してくれたほどである。てきぱきとした判断、手順のよさ。人生目標も揺るぎないように見える。

「新しいことが好きで、人と会うのが楽しい。物事はどんどん進めていきたいな」

明るい表情で言った。

（竹下）

「経済インゼミ」実行委員長 多才に「学費ていどは株式で…」

商学部4年 岡本健太郎さん

差し出された名刺には、mixiID[1507796]の数字が並ぶ。「多くの方と知り合いたいので、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の連絡先も載せています」。普段からアクティブに活躍している姿が垣間見える。

昨年の秋に中央大学で開催された、日本学生経済ゼミナール関東インナー大会（以下、経済インゼミ）で実行委員長を務めた。経済インゼミとは、加盟する24の大学から約2000人が参加する、日本最大の学生経済ゼミ大会だ。加盟大学が毎年持ち回りで担当し、昨年は中大が会場校だった。

思い返せば高校3年になった春、偏差値は振るわなかったらしい。学期初めの思考転換、最後の1年を頑張り抜いて中大に現役合格した。

「せっかく努力して大学に入ったのだから、遊んでしまってはもったいない」と、学術団体の証券研究会に入会。そんなとき、先輩から経済インゼミへ誘いの声がかかった。準備期間は2年に及び、気がつけば中心に。実行委員長という立場ではバイトをする余裕もなかったが、「趣味の株式投資で生活費程度は稼いでいたので、なんとか乗り切りました」。

さらりとおっしゃるけれど、極意をたまわりたい羨ましさである。

大舞台を踏んで1年。自分が活躍できる機会を与えてくれた中大に恩返しの気持ちから、「白門連合」という中大応援団的な組織を仲間と結成した。「中大生が、もっと学外に視野を広げ、接点を持てる企画を展開したいです」。本格的な事業は来年度からというが、大プレゼン大会や、キャリア・デザインを考えられる企画などを思い描いている。

4月からは大手信託銀行へ進む。業務を通じて多くの人と出会い、ネットワークを広げていきたいという。ちなみにマイミク（ミクシーを介してつながる友人）の数は現在200人あまり。「1000人ぐらいのマイミクを目標に、人脈が豊富な人間を目指したいですね」

（滝沢）

社会人ドクターへの〈閃き〉「人間の感性をロボットに」

大学院理工学研究科修士2年 小宮香織さん

修士課程2年（経営システム工学）の小宮さんは、春から三菱電機に勤めながら、博士課程への進学を目指している。いわゆる「社会人ドクター」だ。企業の利益になるような地に足のついた研究がした

くて、社会に出ながらも自分の研究を続けることに決めた。

就職活動は20社。「社会人ドクターを認めてくれる会社以外は就職しないと決めていたんです。落ちても、私が会社に求めるものが大きいのだから、気にしませんでした」

自信なのだろう。

名刺の裏には、おしゃれな電車の写真が印刷されていた。小さい頃から電車や車が好きで、現在では自分が撮影した電車の画像を紹介するサイトを含めて、5つものサイトを運営している。昔からパソコンに触れる機会が多かったそうだ。

大学に入学した当初、やりたかったのは「使いやすいコンピューターを作る」こと。既存のパソコンを人間工学に基づいて改良していくことを考えていた。しかし、3年生になって、考え方がガラッと変わった。人間の感性をコンピューターやロボットに覚えさせたり、まったく新しい未来のサービスを研究していた加藤（俊一 教授）研究室との出会いである。既存のものの改良ではなく、まったく新しいものを考えるその考え方が目からウロコだった。それ以来、小宮さんは研究の面白さに魅了されたという。

4年生になってからは、学会発表などにも参加。院に入る前の学会では、教授のチェックがほとんど入っていないものを発表して、評価された。それを励みに、自分で考えたオリジナルの研究も積極的に進めるようになった。そして修士2年で、所属する庄司（裕子 助教授）研究室仲間の関口佳恵さん（同修士課程2年）とともにソフトを開発し、IPA（独立行政法人情報処理推進機構）の「未踏ソフトウェア創造事業」にプロジェクトが採択された。ソフトの名前は「MochiFlash」。クリエイティブな〈閃き(Flash)〉を作り出す、発想・創作支援するためのこのソフトウェアは、コンピューターを使って共同作業を円滑に進めようというものだった。

大学生活で最もうちこんでいたものは「研究」という小宮さんだが、入学当初は何をしたらいいのか分からなかった、という。子供の頃から、大学になったら学費は自分で払うのよと母親から言われていたこともあって、高校1年生から続けていたマクドナルドのアルバイトを週5日で入り、バイト漬けの日々だったらしい。「ここ2、3年でアカデミックなものに面白さを感じるようになったんです」と笑った。

社会人ドクターって珍しいんじゃないですか？

「でも去年1人いたそうですよ。それも女性の方で」

ショートカットの黒髪。颯爽と先端をいく目の輝きがあった。

（池内）

Campus Now

〝子ども虐待防止センター〟で学んだこと
「人とのつながりを大切にしたい」

法学部4年 **阿久澤英里さん**

大学生活で一番印象深いこと。

「やっぱり子どもの虐待防止センターでの事務局ボランティアのことかな」と言う。

毎日のようにニュースで流れる虐待から子どもを守り、親を支援するために設立された民間団体でのインターンシップ体験である。

阿久澤さんは、準備してきた資料を手に、諸団体の活動や取り組みのあらましの説明から始めた。

「2年次のゼミで子どもの虐待を扱ったときに」と話す。「虐待について、自分が知らなすぎたことに衝撃をうけたんです。支援する側として、どんな人が働いているのか、虐待の実態を具体的に知りたかった」

たどり着いたのが、社会福祉法人「子どもの虐待防止センター」だった。

相談員スタッフは、30―50代。もちろん弁護士、小児科医や臨床心理士ら専門家もいるが、子育て経験のある主婦ら「親の悩みに耳を傾けられる人」で成りたっているという。無料で虐待や子育てに関する電話相談も受け付けている。

「私が手伝えるのは、セミナー準備やテープおこしなど本当に裏方。まさか電話相談は受けられないし」と続けて、「でも、虐待って、決して特別な家庭で起こっているわけではないということを感じました。身近に相談できる人が少ない。でもひとりで育てなくても大丈夫。こういう団体もありますからね。一方で、なんて自分は恵まれているのだと思うようになりました。虐待のある家庭では、当たり前だと思っている生活ができないのです」と話す。

就活の帰りにも、ふらっと立ち寄ったりするという。「あそこは常に誰かいるから、話し相手になってくれる。疲れた～ってね。相談員さんは、全国各地を回っているからそのたびにお土産も買ってきてくださるし……ふふ」。子どもたちと親を見守るセンターは、中の空気も心の休まるところのようである。

4月から、東京弁護士会の事務局職員に。

カタイ弁護士会相手の面接で彼女は、臆せず「趣味は舞台」という話を披露したらしい。

「市村正親と藤原竜也の二人芝居『ライフ・イン・ザ・シアター』を見ました。忙しい時って、何か頭が休まらなくて、変に頭が冴えているというか。そういう時に舞台を観にいって、最初は楽しめるのかなと思ったけど、やっぱり生は最高ですよね。元気をもらって明日からまたがんばろう、という気になる」といったふうに。

面接担当者が、藤原竜也WHO？だったとしても、ふわっとその場が和らぐような効果は大だったにちがいない。

居ずまいを正すようにして、こう言った。

「何かをした、ではなくて、長くやってその中で信頼を築く。行動を起こすときにも、そのつながりを大事にする。そんな人のつながりを大切にしたいですね。だから、この先もセンターには関わっていくと思う。だってそう簡単に切れるものでもないですから」

（白田）

ふる里の消防士への道
「ヨロヨロでは探検部の名がすたる」

経済学部5年　関直志さん

「地元に帰りたい!!　その一心で就職活動を行いました」

春から、地元である栃木・塩谷広域行政組合の消防士になる。

消防士の就職活動時のライバルたちは、「何が何でも消防士になりたくて」全国各地から試験を受けに来るような屈強な人ばかりだった。

「小さいころからヒョロヒョロしていたし、僕は消防士に憧れを抱いたことがなかったので引け目を感じていました。

声が申し訳なさそうである。

そんな強力なライバルのなかにあって、みごとに消防士になることができたのは、

「郷土を愛する力、地元の力、だと思います」

と力強く言った。

大学では、探検部に所属した。副部長もつとめた。

週末には、山登り、沢登り、洞窟

探検を敢行し、夏休みは北海道や沖縄などへ足を伸ばす。南洋・パラオ島へ、玉砕した日本軍人の遺骨収集マップを作りに行ったこともあった。

「探検部のすべてが思い出です。後半は新人指導がわりと多かったですね」

いかにも面倒見のよさそうなタイプだ。他大学の新人探検部員らを引率して一から現場の心得を教えることも何度かあったらしい。

「部員の中でね、探検部はMの集まりだねって笑うんだ。自ら、辛いことに挑戦して、楽しんでいるから。ハハハ」

そんな〝Mの活動〟を通して、体力がついたのはもちろん、精神力もついたそうだ。

順風満帆な大学生活を送ったような関さんでも悩むことがあった。4年の後期。

「5年になるってことも悩みました」

でも、トンネルを抜けて、今では全てのことに感動できるようになった、と言う。知らなかったことを知ったときの喜び、草木を見て感動する新しい自分の発見。

「こんなこと言うと、友だちに『恋してるの？』って笑われますけど」

気持ちを変えるきっかけも、探検部を通してだった。

「自分を本当に好きになれたことが意識の転換につながりました。それも、そういう自分や弱い自分をも認めてくれる仲間がいたからだと思います」

消防職員。じつは父親がそうだった。郷里に帰って父の道を継ぐ、ことにもなる。

「でもなぁ」と言った。「探検部からしばらく離れているから、いまの体力では放水ポンプでもヨロヨロしちゃうかも。鍛えなきゃなぁ」

そして、卒然とこんな決意表明になる。

「一人暮らしのアパートを引き払って実家に帰るときは、探検の一環として、栃木まで歩いて行こうと思うんだ」

一路、凱旋気分？と水を向けたら、「まさかぁ」と照れた。

（岩倉）

すっきりと教壇に立つ『夢は努力すれば必ず…』

文学部4年　山中麻記子さん

広報課で待ち合わせ。周りを見渡したが学生らしき人が見当たらない。職員に聞いたら、落ち着き払った女性を紹介された。てっきりどこかの企業の方かとばかり……。

「山中です」と、包み込むような表情であいさつされた。

東京都の教員採用試験に合格。春から「山中先生」である（中学・高校の赴任先が決まるのはこのあとだが）。そういえば「先生」だわ、と教壇にすっきりと立つ姿を思い浮かべた。

本が大好きで一時は小説家を夢見たこともあったという。が、高校時代に将来どうなりたいのか考えた時にたどり着いた答えは、「先生になること」だった。「人生において運命的だったような気がします」と話す。もう迷うことなく、大学に入学すると教職はもちろん、塾の講師のバイトも始めた。

個人塾でのバイトは週に3～4日。そんな経験もあったせいか都内の公立中学での3週間の実習は「すごく楽しかった」そうだ。

その比較論。「塾は答えを教えるところだったけど、学校にはいろんな子がいて、勉強だけでなく雑学や道徳的な部分を教えるところでした」

よく言われる小・中校の「学級崩壊」の風景にも出合いましたか？

「私のところ（実習先）では、なかったですよ。授業中に携帯はいじ

らないし、中学生はもう幼くないんです。中一はまだ小学生の延長みたいなものだけど中二になるとかなりしっかりしています。ネクタイを頭に巻いてる子はいましたけど……」

教員採用の筆記試験では「和食の配膳の仕方」や「校長の仕事」などの問題もあったらしい。面接では、こうも聞かれた。新卒で若いのに親の気持ちが分かるか？　と。

一瞬たじろぐところだが、山中さんは「生徒は私の子供です」と答えたそうだ。

申し込みが5月、8月の第1次選考から10月の第2次選考（実技・面接）まで、ながながと「引っ張られる」のも特徴だ。

「やっぱり周りの友人が一般企業に決まっていくのはプレッシャーでしたよ」と、本音も漏らす。いまは笑顔で。

それにしても、しっかりした物腰。やっぱりね、「長女」だそうである。

3人姉弟。幼い頃から彼らに「見られている」という意識があったそうだ。

「妹や弟はしっかりしているところは真似しないで、怠けているところを真似するんです。だから自分がしっかりしないと、と思っていました。履歴書を書くときに弟に自分の性格を聞いたら、『真面目』と言われて、自分で真面目って書くのもなぁって……思いましたが（苦笑）」

ロングレンジの人生設計も、しっかり組立てられている。

「先生」→「教員の教員」→「親と分かれて暮らす子供の施設の寮母」→「本に囲まれた生活」……。んー、さすがです。

将来の夢を、一応だれもが持っている。でもそれを実際に叶えるのはなかなか大変です。就職活動中の記者の実感でもあるが、山中さんなら自信をもって、生徒にこう語りかけて励ますはずである。

「夢は、努力すれば叶うのよ」

（大池）

Can

総政発の国際協力団体つくりあげて――
「戦争と子ども」テーマに、「号泣する」手ごたえ

総合政策学部4年　立岩直子さん　栗田慶子さん　石毛啓介さん　加世田龍さん

「PIECE×PEACE FESTA」

総合政策学部の学生が作りあげた国際協力団体だ。創設者の立岩直子さん、幹部の栗田慶子さん、石毛啓介さん、加世田龍さん――運営に尽力した4年生そろってのインタビューになった。

団体の性格を、立岩さんが語る。

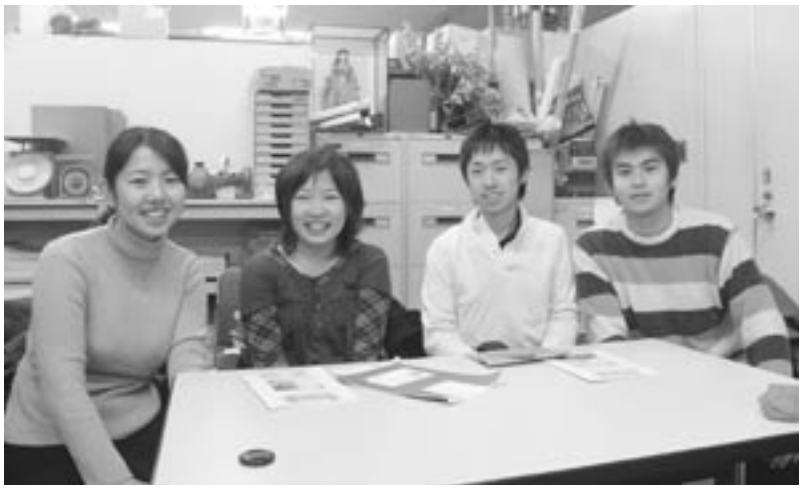
「理念は『Entetainment for World Piece &Peace』です。現在取り組んでいるテーマは、『戦争』と『子ども』です。これまでに、バングラデシュのストリートチルドレン、アフリカの子ども兵士、ミャンマーの医療団体への支援を目的としたチャリティーイベントを開催してきました」

昨年の12月9日、16日にはCスクエアで第3回目となるチャリティーイベントを実施した。

「イベント初日は150人、2日目は200人もの来場者があったんです。ほとんどが、学外の方たちですよ」と加世田さんが声を弾ませる。手応えはじゅうぶん、外務省やルワンダ大使館などの後援も受けることができた。「外務省は初めは定款など多くの書類を提出しなくてはいけなくて、苦労もしたんですが、いったん後援してもらう約束をすればその次からは（実績評価で）スームズに話が進みました。ルワンダ大使とはあるツテがあって、知り合うことができたんです」と、これは石毛さん。こともなげだが、むろん誠意も

熱意も総動員しての大変な作業だったろう。

初代の4人はいよいよ卒業ですね。後輩にはどのような団体に育てても



左から栗田さん、立岩さん、加世田さん、石毛さん

なくて、『やりたいか、やりたくないか』で活動をしていって欲しい。体制なんてものは、壊してナンボですから」と立岩さん。石毛さんが「今は総政ばっかりなんで、他の学部の人にも」と言うと、「いや～無理だろ」

「増えすぎでしょ」と加世田さんや栗田さんがツッコむ。

卒業後はまた別の団体を作るような考えは？

「うーん、また戻ってきちゃうかもしれないですね」と立岩さん。和気あいあい、よほど充実感のある拠点だったのだろう。

やりがいは？とたずねたら、「イベント後のいろんな意味での号泣です（笑）」と4人の笑顔がはじけた。

（有路）

らいたいですか？

「とくに押しつけるつもりはないですね。『できる、できない』では

Campus Now

学生記者取材班

【大学院】
橋本奈緒美＝理工学研究科修士1年

【4年】
猪瀬智巳＝商学部
白田彩乃＝商学部

【3年】
大池夏未＝総合政策学部
滝沢孝祐＝総合政策学部

【2年】
有路恵＝法学部
池内真由＝法学部
池田園子＝法学部
岩倉彩＝商学部
竹下奈穂＝経済学部
中田綾美＝法学部
山崎綾香＝法学部